

# ふたつの国に住む 子・ど・も・た・ち

小西さやか



文化出版局

# ふたつの国に住む 子どもたち

小西さやか



文化出版局

## 小西さやか

津田塾大学英文学科 1960 年度卒業。『音楽の友』（音楽之友社）編集，教職，シェル石油化学製品部技術翻訳等の仕事を経て結婚。ジャーナリストの夫についてワシントン D. C.，ニューヨークを中心に滞米生活 12 年。主婦業のかたわら，自宅近くのマンハッタンヴィル・カレッジ（ニューヨーク州），モンゴメリー・カレッジ（メリーランド州）にて教育学，米児童文学について学ぶ。1979 年帰国。現在，桜美林短期大学英文科講師。

Printed in Japan

---

ふたつの国に住む子どもたち

定価 九五〇円

昭和五十八年四月二十四日 第一刷発行

著者 小西さやか

発行者 大沼 淳

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三の二二の一

郵便番号 一五一

電話 (〇三) 三七〇一三一一 (代表)

振替 東京二一九五六七〇番

印刷所 カバー 文化カラー印刷

本文 図書印刷

製本所 明泉堂

ふたつの国に住む子どもたち 目次

第一章 どこに住んでも本住まい…………… 9

1 マンハッタン子連れ狂想曲 10

やったぞ、ベイビー！ 10

コブ付もまた楽し 12

おのぼりさんから道をきかれて 15

その時、アメリカは時代の曲り角 17

2 子供のためにニューヨーク郊外へ 20

住み処を選ぶという事は―― 20

飾らない付き合いにふれる 24

子供の世界は一つ 27

3 バイリンガル事始め 30

家の中でアメリカ語はダメ 30

おやすみ前は日本語の本 35

4 アメリカ式子育て三題 37

水風呂解熱法 37

## 第二章

### 負けるな日本語

..... 61

#### 1 アメリカの教育はマイペース 62

日本の親たちの学齢ベニツク 62  
飛び級をすすめられたけれど…… 66

#### 2 もっと日本語の本を 70

日本語教室は仮住まい 70  
ああ、図書室がほしい 72  
二十五セント募金 75

「子供には母国の文化遺産が大切でしょう？」 77

#### 3 一時帰国は母国との出会い 80

子供のドクターたち 42  
ベビー・シッター 45

#### 5 アメリカの子供の群れの中で 47

たいへん！ 太郎が女言葉に 47  
太郎はナースリー・スクールへ 50  
「ABC」より「あいうえお」を先に 52  
冴子はキンダーガーテンから 54  
始まった日本語対英語のシーソー・ゲーム 56

## 第三章

### 教育摩擦と取り組んで

80

#### 4 天から降ってきた本の話 84

アメリカの図書館にも日本語の本が  
思いがけない贈物 87 84

#### 1 日本人が増えると…… 90

日本人排斥運動ですって?! 90  
ESL問題で批判の声明文 93  
日本クラブ、領事館も苦慮 95  
摩擦解消に乗り出した母親たち 96

#### 2 アメリカでは黙っていてはだめ 98

音をあげたESL教師 98  
町の教育委員会に乗り込む 101  
解決の糸口、ハンドブック作り 104  
日米バイリンガル・クラスの特設 105

#### 3 ジャパニーズ・マザー集団 108

宗教オンチも乗り越えて 108  
日本株式会社内助の功 111

#### 4 アメリカの子供たちも日本を知りたい

## 第四章

### 日本語教育、あの手、この手

127

- おひな様も文化交流に一役 114
- ニホンゴ講座開設 118
- ヘレンさん母子とニホンゴ 121
- 日本文化センターへの夢 123

#### 1 パパの漢字特訓 123

- 朝三十分のおさらい 128
- 父親の領域 131
- 湖畔で作ったいろはがるた 134

#### 2 本好きはバイリンガルへの早道 135

- 図書室を愛した海外っ子たち 135
- 海外っ子の好きな本 139
- 日本語に強い子は英語の習得も早い 142
- 日本に帰ったら本が読めない？ 144
- 絵本の効用 146
- 小学校三年生の壁を破るには 149
- 英語で面白かったから日本語でも…… 151
- 漫画も方便 153
- 習慣づけたい“読み聞かせ” 155

## 第五章

### 3 夏休みは日本語の書入れ時 157

キャンプ「ふるさと」 157

### 長びくアメリカ生活…………… 161

#### 1 メリーランドに引越す 162

再び隣人に恵まれて 162

東洋の英才たち 165

自ら塀を建てた家 167

垣間見るアメリカ社会の本音 170

#### 2 二度目の一時帰国 174

いつか帰る国 174

駐在員の家族って何？ 177

#### 3 メリーランドの学校生活 179

夏休みの乗馬キャンプ 179

ランナウェイの年頃 181

アイデンティティに目覚める頃 184

卒業式で総代に 187

#### 4 いっ日本に帰るの？ 188

ここでもやどかり日本語学校 188



|   |                 |     |
|---|-----------------|-----|
|   | 間口半間の図書室        | 191 |
|   | 日本語学校の引越し騒動     | 193 |
|   | それでも子供たちには本住まい  | 195 |
| 5 | アメリカおけいこごと事情    | 198 |
|   | 年齢にふさわしいレッスンは？  | 198 |
|   | 日本語をとるか、ピアノをとるか | 200 |
|   | アメリカでの芸術の価値     | 202 |
| 6 | 突然訪れた帰国         | 204 |
| 7 | 子供たちの日本帰線       | 208 |
|   | “人皆同じ”教育の中へ     | 208 |
|   | 本当の自分はどう？       | 211 |
|   | やったぞお前たち！       | 213 |
|   | 付録 帰国後の学校について   |     |

カバー写真 酒井園子  
章扉イラスト 内田喜美子

ふたつの国に住む子どもたち



# 第一章

どこに住んでも本住まい



# 1 マンハッタン子連れ狂想曲

やったぞ、ベイビー！ ■

私たち一家がニューヨークに着いたのは、一九七〇年三月末日、黄昏のケネディ空港にはまだ雪が残っていました。

日航機が着地したその瞬間、

「やったぞ、ベイビー！」

四歳になったばかりの冴子が小さなからだをシート・ベルトの中でビヨンと弾ませて口走りしました。

夫と私は顔を見合わせて思わず吹き出しました。テレビの「ポパイ」で仕入れたらしいこのせりふ、日頃あまり口に出したこともなかったのに、どうして不意に飛び出したのでしょうか。お陰で私たちは空の長旅の緊張から解放され、新しい門出を鼓舞される思いでした。

一歳半の太郎は、ずーっと休む間もなく機内を動き回り、だれかまわず、「イナイイナイバ  
ーッ」の大盤振舞い。着地の少し前からはさすがに精根尽き果てて、私の腕の中でぐったり眠  
りかけていました。

機外に出ると、耳が切れそうな寒風がレインコートを通って肌まで刺しました。私は太郎を  
思わず抱きしめ、夫は、冴子をかばいながらタラップを降りました。

思えば今回は大変な赴任でした。

夫は、アメリカの自動車産業の安全公害問題や規制への対応と、日本車輸出問題をめぐる情  
報活動の拠点となる事務所を開設する任にありました。

前任者がいれば事務所も住宅も引き継ぐことができますが、事務所探しと設営、現地所員の  
雇用、住み家もこれから新聞広告を頼りに……という何もかもゼロからの出発でした。

夫は以前、ベトナム戦争拡大の頃、新聞社の特派員としてベトナム派遣後、ワシントン支局  
勤めとなり、娘の冴子はその時に生まれました。わずか生後六か月で帰国しましたけれど、彼  
女の幼い胸は、自分が生まれた国への熱い思いでふくらんでいたのかもしれない。

「やったぞ、ベイビー！」

とはよくもまあ言ったものです。

二度目の渡米とはいえ、すべて無から始めねばならない上に、私は幼いふたりに両手をとら

れ、身の自由もききません。子育て以外はすべてブルドーザーのごとき夫に一蓮托生、と観念しました。

まずは事務所作りが優先です。マンハッタン町中の五十五番通りに面したキチネット付（小さな簡易台所付）ホテルに泊まりました。このようなキチネット付ホテルやモテルは、アメリカのいたる所にあつて、以後、子供連れの旅行でよく愛用しました。

### コブ付もまた楽し■

夫が事務所の設営に明け暮れる日々、私はその日しのぎの食事、買物、手洗い洗濯の雑事のほかに、子供たちの遊び場を求めて摩天楼の谷間をさまよいました。このおちびさんたちがいなければ、今夜はリンカーン・セクターで音楽会、あすは美術館めぐり、と優雅なマンハッタン暮らしを愉しめるのに……。ところが、太郎を抱いて冴子の手をひいて歩いてみると、子供の目線に入るマンハッタンもなかなかでした。

それにしても太郎の重いこと、「クッケー、クッケー」と靴を持って来て外へ行きたがるくせに、マンハッタンの中では人波と高層ビルに圧倒されたらしく、抱っこばかりしたがりでした。今のように簡便な折りたたみのストローラーなどまだ普及されていませんでした。

遊園地で、メイドさんが歩きはじめの子供に胸から背にかけて皮ひもをめぐらせて、背中の

部分からついている手綱を持って、ちょうど首輪でつないだ犬同様に遊ばせているのが目に留まりました。これはいいものがあったと、その「歩行ひも」をデパートで買って太郎のからだにつけようと思いました。

「さあ、太郎、これであなたも好きなようにお散歩できるのよ」

ところが、太郎は首を横に振っていいいやをくり返すばかりです。夫まで横から加勢をしました。

「犬と同じでたまるかっ、なあ、太郎」

その太郎が、五番街のティファニー宝石店のならびにある紳士服店の前にしつらえられた「ドッグ・バー」は気に入ってしまいました。このドッグ・バーは、お散歩の犬の水飲み場。石造りで、小さな蛇口の下に水受けが彫られてありました。太郎はそこにしゃがみ込んで手をぬらすのが日課になりました。冴子はシュワルツ玩具店の三階から二階に下ってくる波型すべり台に日参しました。

スクリブナー書店、ダブル・デイの本屋さんで、絵本を漁るのも楽しい道草でした。スカーリーおじさんの『ワード・ブック』や『スーパード・マーケット・ミステリー』『パイ泥棒』がちょうど発売されたばかり。私たち母子のかっこうなアメリカ生活の手引になってくれました。

お天気の日にはイースト・サイドの遊園地に二十分以上も歩いて通いました。国連の要員ア



パートの傍、イースト・リバーに面して、鉄柵で囲われた遊園地がありました。錠付で昼間だけ自由に出入りができ、犬などのペットは立入禁止でした。遊園地とイースト・リバーの間を高架ハイ・ウェイが走り、上空には飛行機やヘリコプターが飛び、船と自動車と空の乗物を一望のもとに見ることができました。この「動く乗物絵本」に、太郎は砂遊びやブランコもそっちのけで柵にしがみついて眼を輝かせました。

この遊園地は実に安全対策が行き届いていました。ブランコやすべり台の下には厚さ三センチ以上もあるラバーが敷いてあり、ブランコの周囲には子供が不用意に近づかないよう囲いがめぐらせてありました。お母さんや子守たちは、ベンチでおしゃべりや読書を楽しみながら子供たちを自由に遊ばせて適当に見守っていればよいのでした。

冴子は、ここでクリスティーンという女の子と顔見知りになりました。言葉は交えなくても折紙の鶴を交換したり、干しぶどうの箱を分け合う幼い友情に恵まれました。

セントラル・パークでは、おじいさんやおばあさんたちが、日だまりのベンチで銅像のようにじっと坐っている姿勢を前にくずして、ふたりの頭をなでくれました。

「きれいな髪なこと」

「どこから来たの」

「私もオハイオにこのくらいの年の孫がいてね……」